

[A年]待降節第1主日(2020年11月29日)**【旧約聖書日課】イザヤ書 2章1～5節**

1アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。

2 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって大河のようにそこに向かい

3 多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

4 主は国々の争いを裁き、

多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

【使徒書日課】**ローマの信徒への手紙 13章8～14節**

8互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

11更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。12夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。13日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、14主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ**イザヤ書 2章1～5節**

1アモツの子イザヤがユダとエルサレムについて幻に示された言葉。

2 終わりの日に

主の家の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって川の流れるように

そこに向かい

3 多くの民は来て言う。

「さあ、主の山、ヤコブの神の家に登ろう。

主はその道を私たちに示してください。

私たちはその道を歩もう」と。

教えはシオンから

主の言葉はエルサレムから出るからだ。

4 主は国々の間を裁き、

多くの民のために判決を下される。

彼らはその剣を鋤に

その槍を鎌に打ち直す。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦いを学ぶことはない。

5 ヤコブの家よ、さあ、主の光の中を歩もう。

ローマの信徒への手紙 13章8～14節

8互いに愛し合うことのほかは、誰に対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、貪るな」、そのほかどんな戒めがあっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

11さらに、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚める時がすでに来ています。今や、私たちの救いが、初め信じた時よりも近づいているからです。12夜は更け、昼が近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう。13日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。馬鹿騒ぎ〔別訳→酒宴〕や泥酔、淫乱や放蕩、争いや妬みを捨て、14主イエス・キリストを着なさい。欲望を満足させようとして、肉に心に向けてはなりません。

新共同訳【福音書日課】

マタイによる福音書 24章36～44節

36「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。40そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。41二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。42だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。43このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。44だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

マタイによる福音書 24章36～44節

36「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38洪水になる前、ノアが箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39そして、洪水が来て一人残らずさうまで、何も気が付かなかった。人の子が来る場合も、このようである。40その時、畑に二人の人がいれば、一人は取られ、一人は残される。41二人の女が臼を挽いていれば、一人は取られ、一人は残される。42だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が来られるのか、あなたがたには分からないからである。43このことをわきまえていなさい。家の主人は、盗人が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に忍び込ませたりはしないだろう。44だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・11月29日「待降節第1主日」の日課主題は「主の来臨の希望」。「降誕日(クリスマス=12月25日)」を迎える備えの期節としての「待降節(アドヴェント)」は、西方教会の伝統では4主日が充てられ、「降誕日」前日までの期間として定められてきた。これにより、「待降節第1主日」は、11月30日に最も近い日曜日として定められるが、期間日数は22日から27日まで年により変動する。なお、教会暦の伝統ではユダヤ暦以来の習慣を継承して、定められた祝日の前夜(前日の日没)から祝祭が始める習慣がある。なお、東方正教会には「待降節」を定める習慣がない。

・「待降節」は、聖公会では「降臨節」の呼称が用いられる。いずれも、ラテン語の期節名「アドヴェント(アドヴェントゥス)」の訳語であるが、その語義は「到来/来臨」で、ギリシア語で主の来臨/再臨を意味する語としての用いられる「パルーシア」の訳語として定着し用いられてきた。その語義から、終末の「再臨」を指す場合にも用いられ、2000年前の主の降誕を「アドヴェント」で表すのに対して、終末の再臨を「セカンド・アドヴェント」と呼ぶこともある。このような表現にも表れているように、「待降節」とそれに続く「降誕祭」は、「キリスト教の創始者であるイエスの生誕祭」という意味ではなく、「神の子キリストの到来/神の来臨」を「終末論」神学に基づいて記念する祝祭として位置づけられる。そのような神学的意義付けは、西方教会よりも東方教会において明確であり、東方教会由来の「降誕日」である「公現日(エピファニー)」は、西方教会では東方の三学者の来訪に結び付けられるが、東方教会では主イエスの洗礼と結びつけて祝われ、「復活祭」と共に洗礼志願者の受洗の機会とされてきた。その場合、「待降節」を教会暦に期節として定めない東方教会でも洗礼志願者には三週間程度の断食を伴う準備期間が課せられてきた。

旧約日課(イザヤ2章より)

・「イザヤ書」は、旧約正典中「後の預言者」に分類される預言書の第一巻。紀元前8世紀に南王国で王に直言できる立場にいた祭司であるイザヤの預言とその活動の伝承文書が元になって、その預言活動を継承する預言者集団によって語られた預言が付加される形で、紀元前6世紀のバビロン捕囚期に編集編纂されたと考えられる。39章までは前者、40章以下は後者に相当し、近代の聖書学ではそれぞれ「第一イザヤ」および「第二イザヤ」と呼びならわされているが、単純に二部に分けられるわけではない。

・預言者イザヤの時代(紀元前8世紀)は、同じ南王国でミカが、北王国ではアモスやホセアが預言活動をし、その伝承資料が継承されている。実際の活動の中で相互の交流があったのかは不明であるが、「イザヤ書」と「ミカ書」には共通の神学思想が多いばかり

か、ほぼ同じ預言句が組み込まれており、少なくとも早い段階から一つの伝承集団において預言書としての編集が進められていたと考えられる。日課箇所中 2:1~4 は、「ミカ書」4:1~3 とほぼ同じ預言句である。

・イザヤが預言者として活動した時代は、アッシリアの侵攻に対抗する北王国がシリア(アラム)と同盟を結んで南王国に対峙しながら結局、南王国が援軍を求めたアッシリアによって滅ぼされていった時代で、南王国自体が国際政治に翻弄されて国家存亡の危機の中にあった。イザヤは、当時の南王国王アハズなどに対して、神が王国を存続させる計画を持たれていることを説き、大国に依存する政策を捨てるように勧めている(7 章など)。そのことからわかるように、預言者イザヤの預言の射程は、遠い将来にではなく、近い将来の王国のあり方を預言として告げるところにあったと考えられ、実際、「第一イザヤ」は、「列王記」中で最も評価の高いヒゼキヤ王に関する物語記述で終わっている。それに対して、「第二イザヤ」では、南王国滅亡後の現実の中から、非常に遠い将来までを射程に入れた「終末」的な神の計画の実現を告げる預言に焦点が移っている。日課箇所は、区分としては「第一イザヤ」であるが、上述の「終末」的預言に軸足を持っており、「イザヤ書」編纂時に「第二イザヤ」と同じ視点に基づいて加筆編集された部分であるとも考えられる。

使徒書日課(ローマ 13 章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロの晩年の書簡で、未訪問地であるローマの教会に宛てて、自らの訪問計画を伝えると共に、その後のエスパニア伝道計画への協力を求めるために記された。内容は、パウロが計画している異邦人伝道の神学的基礎づけを示すことにあり、それに基づいてキリスト者としての相互の振る舞い方を教える中に置かれた日課箇所では、「終末」信仰に基づいてその行動の動機づけを示している。

・パウロの「終末」理解は、ユダヤ教ファリサイ派が広く共有していた「終末の復活」信仰を前提にしている。それは、終末に死者が復活させられて神と対面し、裁きを告げられるという「最後の審判」のイメージで知られるものであるが、キリスト者となったパウロは、初代教会で当初信じられていたキリストの復活による「終末」の差し迫った訪れという見方を受け入れていたと考えられる(1 テサロニケ 4~5 章など参照)。ところが、晩年の書簡では、パウロは「終末」を差し迫ったものとして必ずしも示さず、そうすることによって、キリスト者として日々の生活をキリストに属する者にふさわしく整えることに焦点を置くようになっている。差し迫った「終末」意識が信仰者を浮足立たせていたことを見て、「終末」理解を修正したものと考えられる。

・別言すると、パウロは、「終末」信仰を、「最後の審判に耐える希望」を得るためのものとしてではなく、「現

在の困難な世界を誠実に生き抜く希望」を得るものとして、位置づけ直しているといえることができる。

福音書日課(マタイ 24 章より)

・日課箇所は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で共通に伝えられている主イエスの「小黙示録」と呼ばれる「終末」についての教えの一部である。マタイ福音書は、「小黙示録」に加えて三つのたとえと「最後の審判」のイメージを用いた教えを集約させて、主イエスの終末に関する教えとしているが、「小黙示録」そのものについても、マルコやルカとは異なる表現に置き換えるなどして、独自の終末理解を提示しようとしている。

・共観福音書の「小黙示録」を比較する中でマタイ福音書に特徴的な強調に、「人の子が来る」という表現がある。新共同訳で比較すると、マルコ(13 章)には 1 回、ルカ(21 章)には出てこない「人の子が来る」という表現が、マタイ(24 章)では 6 回出てくる。しかも、マルコ(13:26)と並行する箇所(マタイ 24:30)と 44 節を除く 4 回(3 節、27 節、37 節、39 節)で「パルーシア」という独特の用語を用いている。この語は、パウロ書簡をはじめとする使徒書にしばしば見られる用語で、初代教会の宣教の中で重要な神学用語であったことが想像される語であるが、福音書ではマタイの 4 か所以外での用例がない。おそらく、初代教会で「人の子のパルーシア(来臨)」が盛んに語られたのに対して、その意味することの解釈に相違が生じ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書ではこの用語の使用を控えたのだろう。それに対してマタイ福音書は、積極的に「人の子が来ること(パルーシア)」を語ることによって、逆に、一つの明確な解釈を示そうとしているのだろう。

・このマタイ福音書における「人の子が来ること(パルーシア)」を告げることによって喚起しようとしていることは、端的に、続く三つのたとえ(忠実な僕のたとえ、十人のおとめのたとえ、タラントンのたとえ)を通して示されていると考えることができるだろう。これらのたとえは、マルコ福音書では伝えられておらず、ルカ福音書では別の文脈の中で取り上げられているものである。これらのたとえで一貫しているのは、主人(=キュリオス=主)が不在である間、僕らが主人の帰着がいつであっても慌てることなく迎え、自分たちの備えてきたことを示すことができるようにしているべきである、という使信である。その備えが適切になされていなければ、彼らは、主人の家に留まることが許されない、とさえ描かれる。それは結局、主人の不在(と思われる)時であっても主人が臨在であるように身を整えているべきだ、ということである。このようにして、マタイ福音書は、「(将来の)主の来臨(パルーシア)」を「(現在の)主の臨在」と等価に受けとめることによって、「主の僕」としてのキリスト者の現在の生き方、振る舞い方を「終末的な目標」に照準を合わせたものとして教え示そうとしているのであろう。

来週の誕生日 (11月29日～12月日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-230 番「起きよと呼ぶ声」(= I 174「起きよ、夜は明けぬ」)は、16世紀後半ドイツの神学者ニコライの作詞作曲。「コラルの王」と称される讃美歌。この讃美歌に基づいて、バッハ(カンタータ 140 番)らが作曲している。
- ・21-241 番「来たりたまえわれらの主よ」は、「Swiss Noel(Noël Suisse)」という曲名で16世紀以来、スイス・フランス国境地方で歌われてきた「ノエル」のひとつ。フランス語圏では、降誕節に演じられた降誕劇のためにさまざまな「ノエル」が歌われてきた。
- ・21-240 番「主イエスは近いと」(II 48「主イエスは近しと」)は、古代ミラノ司教アンブロシウスの作詞とも言われるが、6世紀の作詞者不詳の詞。19世紀にモックによって作曲された曲がつけられてから、英国教会系の讃美歌集で広く歌われるようになったアドヴェントの讃美歌。
- ・21-229 番「いま来たりませ」(= II 96)は、M・ルターの作詞となっているが、原詞は4世紀のミラノ司教アンブロシウスのラテン語賛歌「Veni Redemptor gentium(おいでください、異邦人の救い主)」に基づく。曲も、アンブロシウスの賛歌に付けられたグレゴリオ聖歌を原曲にルターが編曲。ルターの関わった最初の讃美歌集(1524年)に所収。

21-230「『起きよ』と呼ぶ声」

Wachet auf, ruft uns die Stimme

1. Wachet auf / ruft uns die Stimme / Der Wächter sehr hoch auff der Zinnen, / Wach auff du Statt Jerusalem. / Mitternacht heißt diese Stunde / Sie ruffen uns mit hellem Munde: / Wo seydt ihr klugen Jungfrauen? / Wohlauff / der Bräutigam kompt / Steht auff / die Lampen nimpt / Halleluia! / Macht euch bereit / Zu der Hochzeit / Ihr müsset ihm entgegengeh'n.
2. Zion hört die Wächter singen / Das Herz thut ihr vor Frewden springen, / Sie wachet und steht eilend auff: / Ihr Freund kompt vom Himmel prächtig, / Von Gnaden starck, von Wahrheit mächtig: / Ihr Liecht wirdt hell, ihr Stern geht auff. / Nu komm du werthe Kron / Herr Jesu, Gottes Sohn / Hosianna. / Wir folgen all zum Frewden Saal / Und halten mit das Abendmal.
3. Gloria sey dir gesungen / Mit Menschen und Englichen Zungen / Mit Harpfen und mit Cymbaln schön: / Von zwölf Perlen sind die Pforten / An deiner Stattt / wir sind Consorten / Der Engeln hoch umb deinen Thron / Kein Aug hat je gespürt / Kein Ohr hat mehr gehört / Solche Freuwde. / Deß sind wir fro / jo / jo / Ewig in dulci iubilo.

21-241「来たりたまえわれらの主よ」

O Dieu du clemens

1. O Dieu de clémence, / Viens par ta présence, / Comblen nos désirs, / Apaiser nos soupirs. / Sauveur secourable, / Parais à nos yeux, / A l'homme

- coupable / Viens ouvrir les cieux ; / Céleste victime, / Ferme-lui l'abîme.
2. O bonté divine ! / Dieu vers nous s'incline ; / Du divin amour / Paraît enfin le jour. / Dans une humble étable / Il va naître enfant, / Pauvre et misérable, / Dans le dénûment. / Heure d'espérance ! / C'est la délivrance !
3. Un dur esclavage / Fut notre partage : / De tout l'univers / Il vient briser les fers. / Loin de sa presence / Le péché s'enfuit, / Et par sa puissance / L'enfer est détruit ; / A tous sa naissance / Rendra l'innocence.
4. Gloire au divin Maître / Qui bientôt va naître ! / Que nos chants joyeux / Eclatent jusqu'aux cieux ! / Que les chœurs des anges / Au divin séjour / Chantent les louanges / De ce Dieu d'amour ; / Et que par le monde / Toute voix réponde :

21-240「主イエスは近いと」

Vox clara ecce intonat

1. Vox clara ecce intonat, / obscura quaeque increpat: / procul fugentur somnia; / ab aethre Christus promicat.
2. Mens iam resurgat torpida / quae sorde exstat saucia; / sidus refulget iam novum, / ut tollat omne noxium.
3. E sursum Agnus mittitur / laxare gratis debitum; / omnes pro indulgentia / vocem demus cum lacrimis.
4. Secundo ut cum fulserit / mundumque horror cinxerit, / non pro reatu puniat, / sed nos pius tunc protegat.
5. Summo Parenti Gloria / Natoque sit victoria, / et Flamini laus debita / per saeculorum saecula. Amen.

21-229「いま来たりませ」

Nun komm, der Heiden Heiland

1. Nun komm, der Heiden Heiland, / Der Jungfrauen Kind erkannt! / Dass sich wundre alle Welt, / Gott solch' Geburt ihm bestell.
2. Nicht von Mann's Blut noch von Fleisch, / Allein von dem Heil'gen Geist / Ist Gott's Wort worden ein Mensch / Und blüht ein' Frucht Weibesfleisch.
3. Der Jungfrau Leib schwanger ward, / Doch blieb Keuschheit rein bewahrt, / Leucht't hervor manch' Tugend schön, / Gott da war in seinem Thron.
4. Er ging aus der Kammer sein, / Dem kön'glichen Saal so rein, / Gott von Art und Mensch ein Held, / Sein'n Weg er zu laufen eilt.
5. Sein Lauf kam vom Vater her / Und kehrt' wieder zum Vater, / Fuhr hinunter zu der Hoell' / Und wieder zu Gottes Stuhl.
6. Der du bist dem Vater gleich, / Führ' hinaus den Sieg im Fleisch, / Dass dein' ew'ge Gott'sgewalt / In uns das krank' Fleisch erhalt'.
7. Dein' Krippe glänzt hell und klar, / Die Nacht gibt ein neu Licht dar, / Dunkel mus nicht kommen drein, / Der Glaub' bleibt immer im Schein.
8. Lob sei Gott dem Vater g'tan, / Lob sei Gott sein'm ein'gen Sohn, / Lob sei Gott dem Heil'gen Geist / Immer und in Ewigkeit!